

# 新型コロナウイルス感染症に関する多発性硬化症患者さんへの助言（2020

## 年 6 月 17 日改訂版）

新型コロナウイルス感染症は新型コロナウイルスが肺や気道（鼻、のど、気管）に感染することで発症し、2019 年 12 月に中国で初めて検出された後、世界各国に拡大しています。

現状のところ新型コロナウイルス感染症が多発性硬化症患者さんに及ぼす影響に関する情報は限られています。以下の助言は多発性硬化症の専門家と多発性硬化症国際連合に所属する研究者により作成されました。内容は専門家の意見と、現段階では解析段階にある予備的データを元に作成されていますので、解釈には注意が必要です。なお、この助言は新たな知見が集積されるに従って見直され、改訂される予定です。

MS 患者さん、医療従事者の皆様におかれましては新型コロナウイルス感染症と多発性硬化症に関する調査にご協力いただきますようお願いいたします（[www.msif.org/covid19data](http://www.msif.org/covid19data)）。

## 多発性硬化症患者さんへの全般的な助言

一般に、肺疾患、心疾患をお持ちの方や 60 歳以上の方は新型コロナウイルス感染症が重篤化しやすいことが分かっています。多発性硬化症患者さんの中にはこれらにあてはまる方、他の合併症をお持ちの方、体が不自由な方がいらっしゃいます。

現在まで分かっている範囲では、多発性硬化症をお持ちである事だけで新型コロナウイルス感染症により生命に関わるリスクが上昇することはありません。ただし、年齢が高い方や、多発性硬化症の経過が長く進行型の方、体が不自由な方は新型コロナウイルス感染症が重症化する懸念があります。

すべての多発性硬化症患者さんは、新型コロナウイルス感染症を予防するための一般的な注意事項を守って下さい。以下に世界保健機構の助言の要旨を示します。

- 手指を清潔に保ちましょう（石鹸と流水で洗浄、またはアルコールを含む手指消毒薬の使用）。
- 汚染された（手を洗う前の）手で目、鼻、口を触らないようにしましょう。

- 社会的距離の確保のため、他人（特に咳やくしゃみをしている人）とは最低で1メートルの距離をとって下さい。
- 混雑した場所は避けましょう。
- 咳やくしゃみをする際には、口や鼻を上着の袖やティッシュで被いましょう（咳エチケット）。
- 食品の衛生に気を配りましょう（まな板の使い分けや手指の衛生）

多発性硬化症患者さんにおいては、これらに加えて以下もご注意ください（多発性硬化症国際連合からの追加助言）

- 公共の場ではマスクを着用しましょう。[正しいマスクの使用方法](#)にも注意しましょう。
- 可能な限り公共交通機関の利用は避けましょう。
- 受診は電話など可能な限り対面診察以外の方法を利用しましょう\*<sup>1</sup>。

以下に示す一部の多発性硬化症患者さんは新型コロナウイルス感染症の重症化、生命に関わるリスクが上昇する可能性があります。これらにあてはまる方は特に感染予防に注意して下さい。

- 進行型多発性硬化症の方
- 60歳以上の方
- 体が不自由な方（総合障害度（EDSS）6.0以上の方：総合障害度6.0は100mの距離を歩くのに片手杖が必要な状態）
- 心疾患や肺疾患をお持ちの方

これらにあてはまる多発性硬化症患者さんと同居、または頻繁に接する家族や介護者も、患者さんに新型コロナウイルスを感染させないようにご注意ください。

今後数週間から数ヶ月で各地の都市封鎖や規制が緩和されると考えられますが、新型コロナウイルス感染症に関してまだ不明の部分が多いのが現状です。感染のリスク軽減のため、これらにあてはまる多発性硬化症患者さんとそのご家族、介護者は、しばらくの間上記の助言を守っていただくようお願いいたします。

## 多発性硬化症の治療薬に関する助言

多くの多発性硬化症治療薬には免疫の働きを抑えたり、調節する作用があります。そのため、一部の治療薬は新型コロナウイルス感染症を重篤化させる可能性があります。治療を中断や延期

することで多発性硬化症が悪化してしまう危険もあるため慎重な判断が必要です。多発性硬化症国際連合は以下を推奨します。

- 現在多発性硬化症治療薬を使用中の方は治療を継続して下さい。
- 新型コロナウイルス感染症を発症、またはウイルス検査で陽性と判明した方は、治療継続に関して多発性硬化症の主治医、またはご自身の病状を良く理解している専門家と相談して下さい。
- 新たに治療を開始する方は、ご自身に適した治療薬とお住まいの地域における新型コロナウイルス感染症の危険に関して主治医と相談して下さい。その際、以下の点を検討下さい。
  - インターフェロン、グラチラマー酢酸塩は新型コロナウイルス感染症に悪影響を及ぼさないと考えられます。インターフェロンは新型コロナウイルス感染症による入院のリスクを軽減させる可能性が示唆されています。
  - 情報は限定的ですが、フマル酸ジメチル、フィンゴリモド、テリフルノミド\*<sup>2</sup>、シポニモド\*<sup>2</sup> は新型コロナウイルス感染症の重症化や生命に関わるリスクを上昇させないことが示唆されています。
  - オクレリズマブ\*<sup>2</sup> やリツキシマブ\*<sup>2</sup> は新型コロナウイルス感染症による入院、集中治療の必要性を増加させる可能性があります。この点はさらなる研究が必要です。
  - ナタリズマブ、アテムツズマブ\*<sup>2</sup>、クラドリピン\*<sup>2</sup> の新型コロナウイルス感染症流行期における安全性に関してはさらなる研究が必要です。
- 現在オクレリズマブ\*<sup>2</sup>、リツキシマブ\*<sup>2</sup>、オファツムマブ\*<sup>2</sup>、ウブリツキシマブ\*<sup>2</sup> の治療を受けていて、新型コロナウイルス感染症が流行している地域にお住まいの方は、感染予防に厳重な注意が必要で、自己隔離も検討下さい。
- 現在アテムツズマブ\*<sup>2</sup>、クラドリピン\*<sup>2</sup> の治療を受けていて、新型コロナウイルス感染症が流行している地域にお住まいの方は、血中のリンパ球数に関して主治医と相談して下さい。血中のリンパ球数が少ない場合は可能な限り他者との接触を避けて下さい。

新型コロナウイルス感染症の蔓延を理由に以下の治療薬の追加投与を延期すべきかどうかの判断は国により異なります。アテムツズマブ\*<sup>2</sup>、クラドリピン\*<sup>2</sup>、オクレリズマブ\*<sup>2</sup>、リツキシマブ\*<sup>2</sup>。これらの治療を受けている方で、追加投与の時期が近い方は、投与を延期することの利点とリスクを主治医と相談して下さい。

## 自家造血幹細胞移植\*<sup>2</sup>に関する助言

自家造血幹細胞移植にあたっては強力な化学療法を行うため、免疫機能を一定の期間強力に抑制します。この治療を受けて間もない方は、新型コロナウイルス感染症が蔓延している間は通常よりも長く他人との接触を避けてください。近日中にこの治療を予定している方は治療を延期することを主治医と相談して下さい。

## 再発や他の健康問題に対して受診を考える際の助言

多発性硬化症患者さんが再発や、感染症など他の疾患を疑う体調の変化を感じたときには通院中の医療機関に相談して下さい。この際、オンライン診療や電話相談など対面診察以外の対処方法が可能かどうかご相談下さい<sup>\*1</sup>。再発は在宅療養で対処可能な場合もあります。

再発に対するステロイドの使用は多発性硬化症の専門家と相談の上で慎重な判断が必要です。新型コロナウイルス感染症の流行期には、ステロイドの使用は重度の再発に限定することを勧めます。再発に対してステロイドを使用した場合は、十分な期間、感染予防に厳重な注意が必要です。

新型コロナウイルス感染症流行下においても、多発性硬化症患者さんは可能な限りリハビリテーションを継続し、活動的に生活して下さい。感染予防策が充分にとられているリハビリテーション施設の利用や、リモートセッションの活用をご検討下さい。精神的不調を感じている方は主治医にご相談下さい。

## 妊娠中の多発性硬化症患者さん、小児の多発性硬化症患者さんへの助言

現時点で、妊娠中の多発性硬化症患者さんに対する特別な助言はありませんが、妊娠中の方における新型コロナウイルス感染症に関する全般的な情報を参照下さい（アメリカ疾病予防管理センターウェブサイト <https://www.cdc.gov/coronavirus/2019-ncov/specific-groups/pregnancy-faq.html>）<sup>\*3</sup>。

小児の多発性硬化症患者さんに対する特別な助言はありません。上記の全般的な注意事項をご確認下さい。

\*1 現在本邦では慢性疾患の患者さんの定期処方については電話などによる診療によりファックスなどで処方箋をだしてもらうことが可能になっています

（[https://www.ajha.or.jp/topics/admininfo/pdf/2020/200228\\_7.pdf](https://www.ajha.or.jp/topics/admininfo/pdf/2020/200228_7.pdf)）。ただし、まだ医療機関ごとに対応が異なる場合があるため、通院中の医療機関に問い合わせをお願いします。

\*2 上記の薬剤の内、以下は本邦未承認です。アレムツズマブ、クラドリピン、オクレリズマブ、リツキシマブ、ウブリツキシマブ、テリフルノミド、シポニモド。また本邦では多発性硬化症に自家造血幹細胞移植の保険適用はありません。

\*3 本邦においては以下の日本産婦人科感染症学会ウェブサイトが参考になります

([http://jsidog.kenkyuukai.jp/information/information\\_detail.asp?id=101358](http://jsidog.kenkyuukai.jp/information/information_detail.asp?id=101358))。

(上記の内容は、英語の原文を北海道医療センター脳神経内科医長の宮崎雄生先生に

翻訳していただいたものです。)